

自分の喋り方は

北九州弁というには角がなさすぎるし  
熊本弁というには年数が足りなそうで  
北熊弁だなんて言ってみてラーメンを  
思い出したのは自分でもいただけない  
と思いつつ小倉で食べた家系ラーメン  
の脂っこくて飲み切れなかったスープ  
の上澄には透明な層があつてその下の  
泥みたいな層とはきっぱり分かれてた  
ことなんかもふと思ひ出した

地元を誇れないのは悲しいことだと思ふ半面、誇るところがないのが悪いよ  
など思う。毎年八月の初めにやる祭りはもう何年も嘘を続けてるし、中学の  
廊下には願書の書き方の隣に履歴書の書き方がでかど貼つてあるような  
街だし、卒業式には警察が来るし、一番仲が良かったあいつは養育費に追わ  
れて人から二十万借りて連絡をしないし、そのくせ飯には誘ってくるし。今  
でも続いている友達は何んに対してはまあいい奴なんだけど「お前さ、こっち  
における間はフリーなんやけんヤリ放題やん」って煙を吐きながらクラブに誘  
ってくるような奴でもある。俺は彼女を裏切りたくはないので最後まで付き  
合い切れはしないのだけれど、それに答えはしないのだけれど。そういう濁  
りは心が楽でたまにありがたい。

地元と違ってこっちのいいところはいくらでも出るんだけどなって言ってみ  
て、でもそれってこっちが地元じゃないってことじゃんって気づく。こっち  
の人が良い人ばかりな気がするのは多分みんな大学で出会ったから。「良